

留 学 報 告 書

令和 8 年 9月 10日

研究科 _____ 法文学部 法経学科 _____

氏 名 _____ 阿武 佳祐 _____

1. 留学先大学・学部 国名 _____ 中華人民共和国 _____

大学名 _____ 閩南師範大学 _____

現地到着日 (2025年9月1日) _____ 授業開始日 (2025年9月9日) _____

現地出発日 (2026年7月14日) _____ 授業終了日 (2026年7月3日) _____

2. 日本を出発するまでの主な手続き及び準備

7月頃、ビザ申請のために、入学通知書と事前に申請したJW201、パスポート、証明写真を持って大阪にあるビザセンターと自宅を二往復ほどしました。また、同時期に中国渡航者用の健康診断を受けました。留学先大学の担当の方と連絡し、保険の手続きや渡航日の報告をしました。

3. 自宅から留学先大学までの交通手段 (乗物の種類, 乗り換え地, 所要時間)

成田空港から厦門高崎空港まで4時間ほどです。初回は、大学側が空港までタクシーを手配してくださいました。厦門駅から漳州駅まで高速鉄道で行き (約30分)、そこからバスで向かう (約50分) ことも可能です。

4. 留学先大学での各種手続きの仕方

基本的には宿舎、ビザ、講義等の手配は全て先生又はボランティアの方と話し合っ決めて決める形になるので省略します。

5. 留学生へのオリエンテーションの内容及びプレースメントテストについて

留学生向けの入学式兼オリエンテーションがありました。プレースメントテストは特に無く、中国語クラスの場合は先生との相談でどのレベルにするかが決められます。

6. 授業の受け方、ペーパー及び試験の傾向等について

基本的には対面での授業でした。学期の中頃に科目によっては中間試験があり、期末には筆記試験またはプレゼンテーション試験があります。

7. 留学先大学で学んだ科目のうち特に良かったもの、後輩に勧めたいもの

自分の場合、中国語の授業を受けつつ、他の学部の授業をいくつか聴講するスタイルでした。特にこれ、とは決められませんが、中国語の授業はどの科目の先生も年齢の近い人が多い&少人数なため、それら授業の中で、中国語の文法や発音、会話を練習する良い機会が沢山あります。

8. 留学先大学の住居の種類等について、後輩にどのような寮・アパートを勧めるか

原則大学内の留学生寮（新と旧2つ有り）になります。1部屋に最大4人住むのと、施設は最低限（給水所と有料洗濯機があり、冷蔵庫や厨房等はありません）で虫も多いので、もしそういった環境が合わなければ大学外でアパートを借りることもできます。

9. 寮・アパート生活での注意、生活の様子（行事など）、困ったこと、ルームメイトとの付き合い方、（いつから入れるのか、寮の開閉、寮が閉鎖中の滞在場所等）

寮に来たばかりのとき、マットレスやカーテン（他にルームメイトがいない場合）、バスマットをタオバオ等で早急に購入することを推奨します。また、前述の通り冷蔵庫がないので、必要な場合は購入が必要です。寮は門限があります(7:00-23:30)。

行事に関しては、留学生担当の方々が様々な催しを企画して下さいます。中国の祝日、伝統にちなんだものも多いので、楽しむと同時に中国の文化を知るきっかけにもなりました。

10. 留学先での金銭の扱い及び貴重品の管理について

（どのような口座を利用したか、現金とかカードの利用は、自宅からの送金はどうしたか等）

中国では、スマホでの決済がかなり普及しています。なので、現金はスマホ決済が使えなかったとき用の分があれば十分だと思います。

銀行口座に関しては、現地で中国建設銀行の講座を開設しましたが、wiseのデビットカードをAlipayやwec

hatpayに登録して決済する機会が多かったです。wiseにはネットバンクを使って転送を行いました。現地の友達にwechatで転送する場合や建設銀行で振込をする場合は海外のバンクカードが直接使えないので、更にwiseのカードで人民元を引き出し、建設銀行に入金する方法をとりました。

11. キャンパス案内（どんなとき、どこへ行けばよいか等）

宿舎から歩いて数分圏内に複数の食堂やコンビニ、また学生街に面する東門があるので、食事に関しては、デリバリーを含め遠くて困るような機会はないと思います。また、タオバオやジンドン等ネット通販から来た荷物を受け取る場所も食堂のすぐ近くにあります。もし自炊をしたい場合は、瑞京という地区の食堂内にある厨房が使えます（要予約）。

中国語を学ぶ場合は、専ら留学生宿舎近くの総合楼で授業を受けることとなります。他の学部の授業を聴講する場合などは他の棟での授業となる場合があります。

13. 失敗談（どんな小さなことでも）

やはり、言葉の壁は大きかったです。例えば、マットレスを注文したときに、上述の荷物受け取り所が機械の不具合で使えなかったようで、配達員の方が直接電話してきたのですが、うまく聞き取れず、4分前後かかってようやく意図を汲み取ることができました。留学の後半の方になると、電話をかけたり受けたりもある程度できるようになったので、それもこういった経験があつてこそなのかなと感じました。

14. 病気になった場合の対応について（医療費はどのようになっていたか、保険等はどのようにしたか）

食堂の近くに診察室があるので、もし体調が良くない場合はそこが利用できるはずです。保険に関しては、最初は島根大学側の保険にのみ加入する予定でしたが、後に閩南師範大学の方でも現地の保険に加入するのが義務だったようで、結局そちらも加入することとなりました。

15. お世話になった方々

双方の大学の留学生担当の方々は勿論、閩南師範大学のボランティアの学生方、中国語の先生の方々の協力無しではこの留学経験は成り立ちませんでした。また、僕を食事や遊び等に誘ってくれた隣室のZ君はじめベトナム人の方々、日本人教師のY先生、日本語学科の学生方、実習に来てくださった常葉大学及び関

東学院大学の皆様とのお時間が長期間の留學生活において心の支えとなりました。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

16. 留學先国内旅行について（場所、手段、費用、旅行社等）

福州、厦門、深圳、香港及び金門島へ行きました。旅行社は使いませんでした。同じ福建省内の厦門や福州は高速鉄道で数百～千数百円なので、週末を使つての旅行もできる範囲です。金門島も厦門からフェリー（予約推奨）が出ていて比較的近いので、閩南師範大学に留學するならついでに行く絶好の機会だと思います。

17. 気候と服装について

日本より夏が長めな気候となっております。冬が案外寒いので、通販でジャケット等購入するか、日本から持ち込むことを推奨します。

19. 留學に際し最も役立った本は（専門書、旅行案内書を含めて）

本はあまり使わず、わからないことは都度googleやbaiduなどで調べるか、友達づてで情報を入手していました。中国語に関して、僕はNHK出版の文法書と朝日新聞社のスーパーラーナーを愛用していました。授業は全て中国語または英語なので、あると心強いと思います。

20. ホームステイの依頼方法

ホームステイはしていません。

21. 留學費用について

1) 旅費	(往) 25,000円	(復) 36,230円
2) 準備費用		50,000円
3) 大学へ納入する費用		650,000円
授業料（年間合計）※島根大学へ納入		540,000円
保険等その他の費用		110,000円
4) 住居費（光熱費等含む）		4,000円
5) 衣服代、その他雑費		600,000円

6) 帰国時の土産代, 郵送料等	12,000円
7) 留学先国内旅行費用	60,000円
8) 上記を含めその他すべてを含めた合計金額	1530,000円
現地通貨 人民元 日本円換算(レート)	1元=24円

22. 帰国時の荷物の作り方, 送り方等

特に荷物は送らず、追加でスーツケースを買い、荷物は全てショルダーバッグ1つ、リュックサック1つ、スーツケース2つに詰め込みました。

23. 留学して得たこと (全般についての感想文)

今回の留学生活を通して、語学力の向上とともに、様々な中国及び閩南文化を学ぶことができました。

また、困ったときには自分から周りの人に聞く、伝える、又は頼ることの大切さが身にしみて感じました。宿舎が原因不明の停電が起きた、荷物が間違った場所に配達されている、タクシーを呼んだ後忘れ物に気づいた等、留学生活上で大小様々なハプニングやイレギュラーが発生します。今挙げたこれらの例は全て実話で、タクシーの件に関しては運転手に待ってもらい急いで荷物を取りに行けましたが、停電に関しては2日後に隣の子が訪ねてきてようやく解決、荷物は連絡を試みたものの結局受け取れずじまいでした。(自分の言うことがうまく伝わらなかったらどうしよう)(これを尋ねて相手が怒ったらどうしよう)などと考えてしまい、聞かないといけませんが、その勇気がない、みたいなやきもきする状況もありました。ただ、今改めて考えると、電話や対面でなくチャットでやりとりする、近くの友達に似たようなことが以前あったか聞く等、他の手段で情報を知り、又は得れば早く解決できたのかもな、と感じます。他の留学経験者の方々がおっしゃるとおり、「わからない事は自分から聞く」のはとても重要です。

それはさておき、一年の留学のなかで、たくさん中国語を試す機会があり、中国内外のいろんな友達と逢うことができたので、個人的には留学をしたかいがありました。留学するかどうかは高校生のときからずっと迷っていて、大学生活もそろそろ終わる時期にようやく決意しましたが、それでもこの選択は間違っていなかったと考えています。